

第4回BAクリエイターズサロン実施概要

第4回BAクリエイターズサロンは、プロデューサーの水口哲也氏を招いて、為ヶ谷顧問(女子美術大学 大学院・教授)の司会により、7月31日(木)虎ノ門フォーラムで開催されました。

水口哲也氏は、1965年北海道生まれのプロデューサーで、ゲームの代表作である『Rez(レズ)』は、2002年欧州アルスエレクトロニカにおいて、インタラクティブアート部門Honorary Mention、経済産業省デジタルコンテンツグランプリ・エンターテインメント部門サウンドデザイン賞、文化庁メディア芸術祭特別賞などを受賞している。2006年には全米プロデューサー組合(PGA)が選ぶ「Digital 50」(世界で注目すべきデジタル系プロデューサー50人)に選出されました。また2006年には音楽ユニット「元気ロケッツ」のプロデュースを開始し、音楽と映像のハイブリッドな表現を世界に向けて発信中です。

水口哲也氏の講演の概要を以下に紹介します。

講演は、1972年7歳の時に、初めてアタリ社のテレビゲームに接触した時から、現在までのクリエイティブな分野における取り組みの系譜を踏みながら、氏のクリエイティブな活動の源泉に触れる大変素晴らしいお話で、参加した皆さんも大変感銘を受けておりました。

大学ではメディア美学を専攻しており、小説を書いたり、ミュージックビデオや映画の制作などをしてきた水口氏が、ゲーム会社に就職したのは、セガの体感ゲーム「R360」を体感してから、世界に向けて映像や音楽を発信していきたいとの思いを強く持ったからだと言う。1990年頃から、コンピュータグラフィックスも3次元になり、質感もリアルな表現できるようになってきていた。映像のリアリティーを生かしたカー・ラリーのゲーム等のプロデュースを経て、本格的に映像と音楽によるエンターテインメントの創出に取り組むようになった。水口氏のプロデュースした『スペースチャンネル5』は、マイケル・ジャクソン氏が出演を熱望したゲームとしても知られている。ハイビジョンや5.1サラウンド音声など、映像や音声のクオリティが上がってきたことにより、人が感情移入出来るような映像の世界が実現してきた。そこに、新しいインタラクティブなゲームの世界を目指して、映画や音楽ゲームに挑戦してきている。その過程で生まれた「元気ロケッツ」のミュージックビデオ「天国のような星」がYouTubeに流されたことにより、米国元副大統領のアル・ゴア氏が呼び掛ける地球温暖化問題をキャンペーンする、世界7大陸を結ぶライブショーのプロデュースをする機会がもたらされた(2007年7月7日)。インターネットの動画配信による新しい状況が生まれたことにより、物事が凄いスピードで進んで行くことを実感し、これからの取り組みをよりグローバルに展開して行くことを目標にしている。地球規模で何かが変わるような技術状況になってきたが、重要なことはそこでのメッセージは何なのか、何をしたいのか、コンテンツは何が求められているのか、などをしっかりと考えることであると言う。そこでは、常にプラス思考で、クリエイティブに問題を捉えることが重要だと述べる。

水口氏は、今年の東京国際映画祭のプロデューサーに指名された。赤いカーペットの代わりに、ペットボトルから再生された緑のカーペットを敷くなど、斬新なアイデアで取り組みを始めている。

若いクリエイターに対しては、最初に思いついた発想を大事にすることとともに、10年後に実現するようなアイデアを何時でも引出しにしまっておくことが大切だと説いた。そして、細かい技術は追わないで、大きな流れを常に見られるようにしておくことが、クリエイターにとって大切だと締めくくられた。

水口氏の講演は、多くの示唆に富んだ内容であったが、ここでは全てをお伝えすることができないことをお許しいただきたい。

(文責: 為ヶ谷)